奈良教育大学紀要　第65巻　第１号（人文・社会）平成28年
Bull. Nara Univ. Educ., Vol. 65, No.1 (Cult. & Soc.), 2016

芸術系大学以外の学生が制作者として アートプロジェクトに参加する意義

―「学園前アートウィーク2015」における共同制作の実践事例―

狩　野　宏　明　奈良教育大学美術教育講座（絵画）

The meaning of participation in art projects for non-art students as creators :

Practical examples of collaboration at the “Gakuenmae Art Week 2015”

Hiroaki KANO
(Department of Fine Arts Education, Nara University of Education)

Abstract

The objective of this study is to shed light on the meaning of non-art students’ involvement as creators in regional art projects from an educational point of view. In 2015 November, a new art pro-ject entitled “Gakuenmae Art Week 2015” was held in Nara prefecture. The author participated in this art project as an exhibiting artist and at the same time, also organized and planned the collaboration of art works of students from Nara University of Education, Tezukayama University and Tohoku University of Art and Design with another exhibiting artist, Mr. Natsunosuke Mise.

Through a division of labor, the students interacted with each other on the conception, production and exhibition of their collaborations. This study presents the methodology on the implementation of art creation activities through the coordination of multiple universities. This study also confirmed that the coordination with artists and the engagement reference of art universities are linked to the resolution of technical problems and study on the diverse thoughts concerning the creation of non-art students. This research study has demonstrated practical examples especially for students aiming to become teachers, on how to master and acquire overall execution and flexibility skills based on the various values that are necessary as future teachers.

キーワード：芸術系大学以外の学生，アートプロジェクト，共同制作

Key Words：non-art students, art projects, collaboration of art works

１．はじめに

本研究は，地域型アートプロジェクトに芸術系大学以外の学生が作品制作者として関わることの意義について，美術教育的視点から明らかにすることを目的とする。

日本国内の大学において，芸術に関わる学部，学科は数多く存在し，その中での学びの内容と形式も多岐にわたっている。本論では，文部科学省が設定する「学科系統分類表」(1)において「芸術」の大分類に含まれる学部を有する大学を芸術系大学と位置づけ，それ以外の大学を芸術系大学以外として考察の対象としたい。

現在，日本全国で多くの地域型アートプロジェクトが開催されており，大学生が制作者やボランティアとして参加する事例が多く見られる。特に制作者として大学生が参加する場合は，芸術系大学に在籍する若手アーティストにとって実践の場の一つとなっており，その成果が報告されている。

地域型アートプロジェクトにおける作品制作は，その土地のフィールドワークや人々との交流を通した作品構想，本来展示スペースではない場所での展示方法の検討など，制作者にとって総合的な実践力を問われる場である。それゆえ地域型アートプロジェクトへの制作者とし

ての参加は，芸術系大学の学生だけでなく，総合大学や教育系大学の学生にとっても，美術教育実践力の向上に関わる，多様な教育的意義が含まれた活動となることが予想される。

2015年11月，奈良県において新たな地域型アートプロジェクト「学園前アートウィーク2015」が開催された。筆者は，本アートプロジェクトに出品作家として参加すると同時に，奈良教育大学，帝塚山大学，東北芸術工科大学の異なる専門領域の学生による作品の共同制作を企画，実施した。

本研究では，「学園前アートウィーク2015」での実践を具体的な分析対象とし，地域型アートプロジェクトに特有の作品制作が，総合的な美術教育実践力の向上に関わる契機となることを論証する。

2．先行研究および本研究の位置付け

2.1. 芸術系大学以外の大学生による地域型アートプロジェクトにおける実践

アートプロジェクトについて熊倉純子は，「現代美術を中心に，おもに1990年代以降日本各地で展開されている共創的芸術活動」[(2)]であると定義している。この日本各地で開催されているアートプロジェクトの現場では，大学生による取り組みも数多く確認することができる。

その中でも芸術系大学以外の大学生による取り組みの研究としては，加藤修らによる千葉大学での実践報告[(3)]が挙げられる。同論文では，千葉大学の普遍教育教養展開科目「アートをつくる」の実践例を挙げ，地域と連携したアートプロジェクトの教育的意義について，ESD（Education for Sustainable Development 持続可能な開発のための教育）の観点から検証している。千葉大学の「アートをつくる」では，総合大学の利点を生かし，各学部の様々な専門領域に所属する学生が共同して，地域と連携したアートプロジェクトを企画・実施している。同論文では，特に教育学部学生は次世代教員として「実践的環境における多様な価値観との出会いやそれらに対する対応力を身につけていなくてはならない」[(4)]ことが指摘され，地域や他領域の学生間での共同活動は「バランス感覚と実践的能力を併せ持った専門領域人の育成を可能にしている」[(5)]と述べられている。また同論文において，プロジェクト参加学生の三宅中による考察では，学生にとっての教育的意義として「地域に対する認識の変化と社会参画への関心や意欲が促進される」，「即自的意義（内容自体の面白さ）」，「キャリア形成」の３つが挙げられている[(6)]。

加藤らによる実践は，地域と連携したアートプロジェクトが芸術系大学以外の学生にとっても，多様な教育的意義を有することを包括的に示している。また地域との交流だけでなく，大学内においての他領域間の共同活動が，実際のプロジェクト実施時に，専門領域を活かした役割分担を可能にするとともに，互いの価値観や情報の伝達による柔軟な思考の展開を促すことを示唆している。

本研究では，上記の先行研究による成果を踏まえ，奈良県内で新たに開催された地域型アートプロジェクトにおける大学生の活動を検証し，奈良の特色に焦点を当てたアートプロジェクトの事例研究として位置付ける。また本研究では，アートプロジェクト参加に際し，他大学の学生同士の共同活動を行うことにより，先行研究における他領域との共同活動について大学間連携の観点から考察したい。

2.2. 大学生による絵画作品の共同制作

前節における考察をふまえ，本研究では奈良県で開催される地域型アートプロジェクトへの参加に際し，大学間連携による作品の共同制作を企画することとした。

共同制作とは，複数の人間が共に一つの作品の構想と制作を行う方法である。単一の作者によって制作された作品が，個人の思考や技術によって成立するところが多いことに対して，共同制作においては必然的に複数の思考や価値観の交流が生まれる。アートプロジェクトにおける地域や大学間の連携について，作品制作の現場で考察する際に，共同制作は準備段階から制作そして展示までを含めて，多様なコミュニケーションの在り方とその教育的意義を示唆してくれると思われる。

地域や大学での領域横断型の交流に基づいた大学生による共同制作の事例として，東北芸術工科大学の「東北画は可能か？」の取り組み[(7)]が挙げられる。「東北画は可能か？」は東北芸術工科大学にて，日本画コースの三瀬夏之介と洋画コースの鴻崎正武により，学生と共に東北における美術を考える活動として2009年にスタートしたプロジェクトである。三瀬によれば「東北画」とは，日本の中での東北という地域名を冠した絵画の成立の可能性を探る目的で考案された呼称であり，東北の歴史的な成り立ちと自身の関係性を読み解くことで，各々の「東北画」が生まれると設定している[(8)]。このプロジェクトでは，地域，歴史の勉強会，フィールドワークを通した作品制作を行い，東北のみならず全国で展示を行っており，学生による共同制作は，その中でも重要な位置を占める取り組みの一つとなっている。三瀬・鴻崎監修によるアーカイヴブック『東北画は可能か？』において，このプロジェクトにおける共同制作の意義について，以下のように述べられている。

東北画における共同制作への取り組みは，今日のアートの現場が，単独の作家性への疑いにより，集団

的な共働性や匿名性へと傾きつつあるという実感に即した，プラットフォームのような美術の現場の創出が出来ないかという試みです。(9)

本研究において筆者は，「東北画は可能か？」において中心的な役割を担う三瀬と同じ会場で展示を行う機会を得た。本研究における学生による共同制作の企画は，三瀬との展示の実現が契機となっており，「東北画は可能か？」による継続的な共同制作の実践は，本研究に具体的な方法論を示してくれることが期待される。

また本研究において実践した作品制作と展示においては，学生の共同制作による作品を，三瀬と筆者がそれぞれに制作した作品と同会場で展示した。つまり本研究は，地域と大学間の共同活動に加え，学生とアーティストが連携して企画，展示を行うという特徴があり，特に芸術系大学以外の学生にとって，作品制作のための思考力や技術的側面も含めた作品の質への意識の向上につながることが予想される。本研究は，学生とアーティストが共に，作品制作における「単独の作家性」と「集団的な共働性や匿名性」の関係性の今日的な広がりを考察する機会ともなると思われる。

以上の先行研究の考察と本研究の位置付けを踏まえ，次章では本研究における具体的な実践の概要について述べていく。

3．「学園前アートウィーク2015」の概要と参加経緯

3. 1.「学園前アートウィーク2015」について

奈良県内では，すでに複数のアートプロジェクトが継続的に実施されている。奈良の空き町家を活用した「奈良・町家の芸術祭　はならぁと」(10)や，障害者の造形活動の魅力を広く紹介する「奈良県障害者芸術祭HAPPY SPOT NARA」(11)などの取り組みを通して，地域住民や教育機関とアーティストが様々な形で交流を行っている。

このような状況の中，2015年11月，奈良県奈良市の近鉄奈良線「学園前駅」南エリアにおいて，新たなアートプロジェクト「学園前アートウィーク2015」が開催された（図１）。

「学園前アートウィーク2015」の特徴は，戦後開発された学園前駅周辺の郊外型ニュータウンの歴史と現状そして展望に焦点を当てた取り組みである点にある。「学園前アートウィーク2015」公式ホームページには，本プロジェクトの開催趣旨について以下のように記載されている。

近鉄「学園前駅」周辺エリアが有する「文化･教育･商業施設」は，全国的に見てもトップクラスの充実度を誇ります。しかしながら初期の開発から60年以上を経た今，少子高齢化に加えて，新たに移り住む人々も増加し，街の様相も変わりつつあります。

そこで地域に住み暮らす人々が，地域の魅力を見つめ直し，積極的に交流を行うことで街を育てる「街育」を推進することが必要とのことから，現代アートイベント「学園前アートウィーク2015」を開催します。

現代アートの分野で活躍する美術家たちの活動は，「今を見つめ，近未来的な問題を提起し，新しい価値観を創出する」ものです。

そんな現代アートの作家を招き，住民，文化施設，学生，作家が一体となって街の課題と向き合い，新たに街の価値を発見・共有しながら，街の活性化を目指してまいります。(12)

図１　「学園前アートウィーク2015」チラシ

奈良市西部から生駒市にまたがる学園前地域は，古都奈良のイメージとは異なる歴史と景観を有している。

学園前地域は，近鉄学園前駅を中心として，戦後の大規模な宅地造成によるブロック単位の新興住宅地が広がり，奈良市中心部へはもとより，大阪市内への重要な通勤拠点として発展してきた。また学園前の名の通り，帝塚山学園を中心とした教育機関と，複数の美術館等の文化施設を有する学術都市としての性格を強く有している。さらに学園前地域は，古代において登美郷と呼ばれた地域にあたり，現在でも地名や旧跡にその名残を垣間見ることができる。

このように，古い歴史と高級住宅街そして文化，教育機関を有する地区として発展してきた学園前エリアであ

るが，「学園前アートウィーク2015」の開催趣旨にも示されているように，少子高齢化とともに街の空洞化が進んでいることがしばしば指摘されている。このような現状を鑑み，「学園前アートウィーク2015」では，プロジェクトのテーマを「イマ・ココ・カラ」と題し，その意図について公式ホームページでは以下のように述べられている。

> 一見「過疎」や「荒廃」とは無縁のエリアに見える学園前。しかしその水面下では，着実に空洞化が進んでいます。空洞化は学園前だけの問題ではなく，少子高齢化の進む日本全国のほとんどの郊外で起こっている大きな社会問題です。その「空洞（カラ）」を，あえて今この学園前で現代美術家の眼で捉え，彼等から投げられたメッセージや作品から問題解決の糸口を見いだしたいと考えています。[10]

プロジェクトテーマである「イマ・ココ・カラ」は，学園前エリアをはじめ全国の郊外型ニュータウンで進行している空洞化（カラ）の問題を，今ここから考察することを意味している。

3. 2. プロジェクト参加の経緯と展示会場について

「学園前アートウィーク2015」では，14名のアーティストが招待され，作品の制作，展示，関連イベントを行った。14名の出品作家は，奈良をはじめ関西の郊外型ニュータウンで生まれ育ったか，あるいは現在奈良に住み制作活動を行っている。筆者は，現在奈良で制作活動を行いながら美術教育に携わっていることから，出品作家の１人として参加させていただいた。

作品展示は，学園前駅近隣の奈良市西部会館，帝塚山大学18号館体育館，GALLERY GM-1，中村家住宅，淺沼記念館，大和文華館文華ホールの６会場で行われ，出品作家が個展形式あるいはグループ展形式で展示を行った。筆者は会場の一つとなった大和文華館文華ホールにて，奈良出身のアーティスト三瀬夏之介とともに展示を行うこととなった。

大和文華館文華ホールは，学園前の住宅街に位置する美術館である大和文華館の入口付近に立つ文化施設である。もともとは，建築家の辰野金吾（1854－1919）によって設計された奈良ホテル（1909年開業）のラウンジであったもので，ホテルの新館増築に伴い取り壊される予定であったが，1985年に大和文華館の開館25周年記念事業の一環として，移築，修復され文華ホールと名付けられた[14]。100年以上の歴史を有する貴重な建築物であり，作品展示や展示期間中は，室内や備品の汚損等がないよう，細心の注意を払う必要がある。さらに作品展示用に設計された施設とは異なるため，展示計画については出品作家の三瀬と協議の上，文華ホールを管理する大和文華館との打ち合わせをもとに練られた。

三瀬との打ち合わせの当初から考慮されたことの一つは，本展示を出品作家の単なる個人的な作品展とするのではなく，学園前をはじめとして奈良の地から発信する継続的な芸術活動の新たな契機となる場を作り上げることであった。三瀬と筆者は，それぞれ東北芸術工科大学と奈良教育大学において大学生の指導に携わっている。このことから，三瀬と筆者それぞれの作品制作に加え，大学生による共同制作を実施し，これら３作品を関連付けて展示することで，地域，アーティスト，大学が連携したアートプロジェクトの実践とその意義を考察する場を創造することを試みた。

以上の「学園前アートウィーク2015」の概要と参加の経緯を踏まえ，次章では大和文華館文華ホールにおける展示について詳しく論じる。

４．大和文華館文華ホールでの展示実践と分析

4. 1. コンセプト

大和文華館文華ホールにおける三瀬，筆者そして大学生による展示全体のコンセプトを「学園前の時空をマップ化するプロジェクト」と定めた。これは三瀬と筆者による打ち合わせの中で，絵地図というキーワードが浮かび上がってきたことがきっかけとなっている。

古来，地図には，地形や位置情報を正確に記載するだけでなく，その土地の重要なものや特徴的なものを強調して描くことで，その土地特有の風土を描きだす役割があった。三瀬と筆者は，絵画を中心とした制作活動を行っており，両者とも様々な土地の風景やもの，また地形的特徴と人間の営みの関係性が制作の重要な源泉の一つとなっていたことから，この絵地図をキーワードとしたコンセプトの構築を試みた。

打ち合わせの中で確認されたことは，絵地図を制作するとはいえ，単なる学園前の観光マップや名所絵を描く必要はないであろうということである。三瀬は，「学園前アートウィーク2015」に向けたステイトメントにおいて次のように述べている。

> 現在，各地で地域型アートプロジェクトが乱立しているが，奈良という古層を掘り起こすことにより見える新たな風景，アートによる飛躍したイメージを付加することにより，老齢化する新興住宅地の未来を考えることは，日本の最先端事例になることだろう。[15]

三瀬が述べるように，本展示が学園前の問題だけでなく，日本の他の土地にも応用可能な事例となるためには，「アートによる飛躍したイメージを付加すること」

が必要であると思われる。前述したように，本展示の目的は，地域，大学，アーティストが連携したアートプロジェクトを通して，学園前を出発点とした奈良の地からの継続的な芸術活動と美術教育を展開することにあり，今後様々な局面で参照可能な事例となることを期待する。

そこで本展示においては，学園前を主とした奈良の過去の景観や今後も保存していくべき景観，新しい景観等を織り交ぜて描くことで，長く多様な歴史を有する学園前の過去，現在，未来を表出した創造的絵地図の制作を目指した。そしてこれを実現するためには，学園前地域や奈良に関する綿密なフィールドワークと，実際の作品制作における確かな技術，そしてその成果を魅力的に提示するための展示計画が不可欠である。これらの工程は二人の出品作家だけでなく，大学生と地域の人々と協働活動を行うことで，より重層的な時空を紡ぐことが可能になると思われる。

4. 2. 展示構成と参加体制

展示準備の開始に際し，2015年６月にプロジェクト実行委員会との打ち合わせと会場下見が行われた。

実行委員会との打ち合わせでは，出品作家が展示コンセプトを説明するとともに，地域の方々から学園前に関する貴重な情報をいただき，「小学生が参加できるようなワークショップ等の関連イベントも開催してほしい」といった具体的な意見交換が積極的になされた。

また実行委員会の構成団体の一つである帝塚山大学からは，本展示における大学生の共同制作に帝塚山大学の学生も参加したいとのご要望をいただいた。学園前駅南口に位置する帝塚山大学の学生が参加してくれることで，学園前についてのより深く多角的な考察を行うことができる連携体制が生まれた。

また会場下見には，出品作家とともに，奈良教育大学美術教育専修絵画研究室の学生が参加した。前述した通り，会場となる大和文華館文華ホールは，100年以上の歴史を有する木造の建築物である。内部の床は赤絨毯で覆われ，壁面は淡いクリーム色と金色で装飾が施されており，大きな縦長の窓ガラスが使用されている。そのため，壁に釘を打ち付けたりテープを貼ったりすることはできず，絵画作品を壁面に展示することは困難であることが確認された。また赤絨毯を汚損しないよう，重量のあるものを設置することは避け，来場者の動線を制限するなどの配慮が必要であることが課題として浮かび上がった。

この会場下見の経験から，展示の際には絵画作品を壁面に固定するのではなく，自立する形式かあるいは床に敷く形式とすることが構想された。そしてこの制約を肯定的に活用し，会場全体に絵画作品を立体的に配置することで，来場者が作品の間を歩きながら，学園前の過去・現在・未来を感じることができる展示構成を模索した。

その後，継続的な打ち合わせを経て，本展示における展示構成と参加体制について以下のように決定した（図２）。

作品１．三瀬夏之介　絵画作品

出身地である奈良･学園前から，現在居住する東北･山形までを含む長い日本列島の様相を絵巻のように描き出すことにより，日本の中の奈良の特質を俯瞰的に浮かび上がらせる。作品は屏風と掛け軸の形式をとり，会場に自立させる。

作品２．筆者　絵画作品

会場の大和文華館文華ホールが，奈良ホテル旧ラウンジであったことにちなみ，100年の歴史を有する奈良ホテルに取材した油彩作品を展示する。

作品は安定脚を取り付け，会場に自立させる。

作品３．奈良教育大学，帝塚山大学，東北芸術工科大学の学生による共同制作作品

学園前周辺のフィールドワークをもとにして，学園前と近鉄奈良線を型取った絵画，立体作品による展示を行う。作品は安定脚を取り付けたテーブル状の形態とし，会場に自立させる。

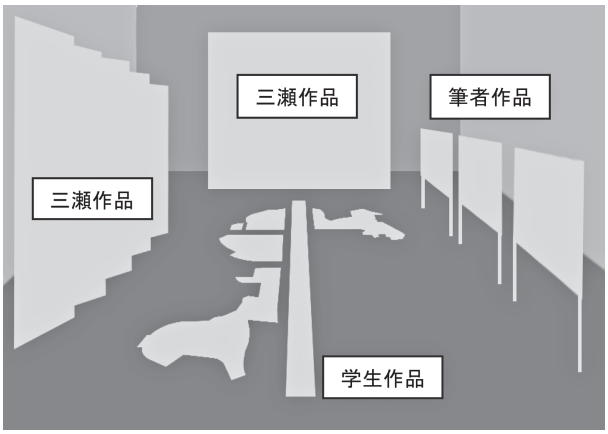

図２　大和文華館文華ホールでの展示イメージ

作品３の学生による共同制作では，以下のような参加体制が組織された。奈良教育大学では，筆者が指導を担当している美術教育専修絵画研究室の学生11名によりプロジェクトチームを結成した。また帝塚山大学では，現代生活学部こども学科教授の都留進の指導のもと，こども学科及び居住デザイン学科の９名の学生によるプロジェクトチームが組織された。また東北芸術工科大学では，三瀬を通じて「東北画は可能か？」プロジェクトチームが継続的に実践してきた活動資料と共同制作の方法論が提供された。

以上の３つの作品は，それぞれ独立した作品として制

作されるが，「学園前の時空をマップ化するプロジェクト」として相互に関連付け展示することを目指した。

次節以降，特に学生による共同制作に焦点を当て，準備，制作，展示について述べていく。

4. 3. 大学生による共同制作の形式と内容

前述のとおり，大学生による共同制作では，学園前の過去・現在・未来をテーマとした創造的な絵地図を構想した。そして本作品の形式上の大きな特徴は，作品の形態自体が，学園前周辺の地図を型取ったものとして構想した点である。

3. 1. で述べたように，学園前地域は，戦後の大規模な宅地造成により，ブロック単位の新興住宅地が建設された。この住宅開発等の経緯と実際のブロック単位の住宅エリアについては，奈良市のホームページ[16]で確認することができる。大学生による共同制作では，絵を描くための支持体（ベニヤ板）を，このブロック単位で区画分けできる住宅地の形に切り取り，その上に絵を描くこととした。さらに，これらの絵画は安定脚を取り付けたテーブル状の形式とし，展示会場では中央に通路を設置してその両脇に作品を配置する。中央の通路は，学園前を通る近鉄奈良線に見立てており，来場者はこの通路から作品を見下ろしながら鑑賞することで，学園前地域の地図を上空から眺めているような状態になる。

これによって展示全体のコンセプトである「学園前の時空をマップ化するプロジェクト」を象徴するような空間を作り上げると同時に，会場を極力汚損しないよう，来場者の動きを通路によって誘導することを意図した。

4. 4. 準備

2015年６月にプロジェクト参加体制が決定し，同年11月の展示に向けて準備が行われた。作品制作は，学園前地域に特徴的な景観（遺跡，自然，住宅，施設等）や歴史（地名の由来，伝承等）についてのフィールドワークから開始した。そしてプロジェクトメンバーは，調査の結果についてテキスト及び制作に活用可能な写真資料等にまとめ，作品構想のための勉強会を開いた。

土地のフィールドワークと勉強会に基づいた共同制作の方法は，東北芸術工科大学の「東北画は可能か？」プロジェクトチームによる継続的な取り組みを参照して行われた。「東北画は可能か？」プロジェクトチームは，2010年に制作された≪東北八重山景≫（2034×3830㎜）をはじめ，東北をテーマとした共同制作による複数の大画面絵画を発表している。その参加体制は，東北芸術工科大学内の複数の領域に跨り，異なる専門性が能動的に交流しあいながら，東北についての深い考察に基づいた共同制作が実現している。奈良教育大学プロジェクトチームは，「東北画は可能か？」の取り組みについて資料研究するとともに，メンバーのうち数名は2016年４月に京都市美術館別館で開催された「東北画は可能か？」（「三瀬夏之介　日本の絵-執拗低音 展」と同時開催）において作品を実見しており，画面構成や描画法について研究した。

学園前地域についてのフィールドワークは，奈良教育大学と帝塚山大学のプロジェクトチームがそれぞれ行った。特に帝塚山大学プロジェクトチームは，学園前に位置する利点を生かし，学園前の多様な景観と歴史についての詳細な調査資料を奈良教育大学に提供してくれた（図３）。

また，実際の制作に使用する支持体（ベニヤ板）は奈良教育大学プロジェクトチームが加工準備を行った（図４）。学園前地域の地図を型取るため，学園前の各エリアを適切な大きさに拡大してベニヤ板に転写し，糸鋸でカットした。そして紙やすりで表面と切断面を研磨した後，白色塗料で地塗りを施した。

今回は制作期間を考慮し，学園前駅近隣の５つのエリアを型取った支持体を加工した。そのうちの４枚を奈良教育大学が制作を担当し，１枚を帝塚山大学が担当することとした。

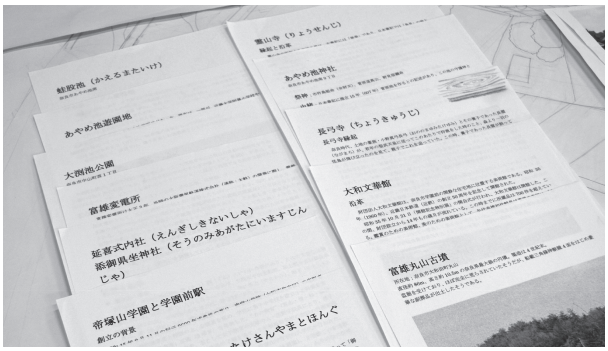

図３　帝塚山大学参加メンバーによる調査資料

図４　奈良教育大学参加メンバーによる制作準備

4. 5. 制作

本作品では，５枚の絵を同時に制作する必要がある。そのため５枚中４枚を制作する奈良教育大学プロジェクトチームは，メンバーを３グループ（A，B，C）に分け，グループＡはパネル①（大），グループＢはパネル②（大）そしてグループＣはパネル③（中）と④（小）を分担して制作することとした。

各グループでは，構想，実寸下絵，本制作の全ての工程に全メンバーが関わり，一人一人の構想を組み合わせ，発展させていった。構想，下絵の工程では，フィールドワークで得た資料を基にした様々な景観や，歴史調査からイメージを膨らませた図像が画面上で組み合わさり，学園前の現実的光景にとどまらない，創造的風景が徐々に生み出された（図５）。

図５　共同制作の様子（奈良教育大学）

例えば，展示会場付近にある蛙股池は，日本書紀にも記述された日本最古の池の一つとも言われるが，制作メンバーはこの池の名前から着想を得て，大きな蛙を画面に登場させた。蛙股池の西側にはあやめ池神社があるが，制作メンバーはこのエリアの聖性を巨大な蛙の姿で表現することを試みた。

さらにフィールドワークや文献調査だけでなく，学生の個人的な記憶が制作に影響を与えることもあった。例えば，学園前駅の隣駅にあたる菖蒲池駅そばにあったあやめ池遊園地（2004年閉館）をモチーフにすることを構想した際には，学生自身が幼少の頃に遊園地を訪れ，メリーゴーラウンドに乗っている写真をアルバムに発見した。あやめ池遊園地のメリーゴーラウンドには奈良の土地らしく鹿の乗り物が交ざっていた。このことから作品中では，メリーゴーラウンドから鹿が飛び出してくるという構想が生まれた。

実寸下絵完成後の本制作では，水彩絵の具とアクリル絵の具で描画を行った。構想，下絵の工程で生み出されたユーモラスで活気のあるイメージを，水性絵の具の軽やかな鮮やかさで描きだすことを目的とした。制作中は，ある学生が下描きした部分を別の学生が着彩し，さらに別の学生が発展させて描き込むといったように，同一画面上で複数のメンバーの行為が重なり合う現象が生まれた。これによって，絵画の制作を通してメンバー同士の思考の交流が生まれ，個人の制作とは異なる重層的な制作プロセスと作品の成立が垣間見られた。

また制作メンバーの中には，彫刻の研究を行っている学生がいたことから，絵画作品に加え，木材を用いた彫刻による街並みの小品を加えることとなった（図６）。彫刻作品の導入によって平面的なイメージだけでなく，立体的な造形が展開され，創造的絵地図からジオラマ的な世界へと派生するきっかけとなった。

図６　彫刻表現への制作展開（奈良教育大学）

そしてこの立体造形的アプローチは，帝塚山大学プロジェクトチームとの連携により，さらに推し進められた。帝塚山大学プロジェクトチームは，現代生活学部こども学科教授の都留進の指導のもと，こども学科と居住空間デザイン学科の学生による帝塚山大学の立体模型を中心とした作品が制作した（図７）。これによって，「学園前の時空をマップ化するプロジェクト」というコンセプトを，より空間的なものへと広げる結果となった。

図７　共同制作の様子（帝塚山大学）

絵画，立体作品に加え，奈良教育大学プロジェクトメンバーは，会場での展示に必要な備品の製作を行った。会場では作品を安定脚に乗せテーブル状に配置するため，安定脚の設計と製作を行った。安定脚は角材と蝶番を用いて折りたためる形状のものとし，搬入出の運搬や展示終了後の保管のしやすさを考慮した。また会場の照明や設備の色調に合わせ，オイルステインで着色した。

さらに会場中央に設置予定の，近鉄奈良線に見立てた通路も学生が手作りした（図８）。会場の赤絨毯を傷つけない重量で，しかも来場者が安全に歩くことができるよう，角材を組み合わせて７つの土台を製作し，会場で一列に並べて通路とすることとした。一番手前の土台はスロープ状にし，また通路が線路の枕木を連想させるよう角材の並べ方を工夫した。

図８　展示用備品の製作（奈良教育大学）

4. 6. 展示

作品制作と展示用備品の製作は2015年８月から10月末までの約３か月の期間で行い，11月の展示を迎えた。

2015年11月７日の展覧会オープンに向けて，11月5日に会場での展示作業を行った（図９）。

三瀬，筆者作品そして学生による共同制作作品を美術品搬入出業者のトラックで会場まで運んだ。展示作業にはプロジェクトメンバーの学生も参加し，現場で展示構成の最終確認を行った。

まず会場中央に通路となる７つの土台を一列に並べ，その両脇に学生による共同制作作品を配置した。会場中央に近鉄奈良線に見立てた通路と，学園前の地図を型取った共同制作作品を配置することで，学園前から発信する新たなアートプロジェクトを象徴する展示空間の基軸とした。そして会場左側と中央奥には三瀬作品を配置し，会場右側に筆者の作品を配置した。三瀬作品が墨やアクリル絵具を使用した屏風や掛け軸形式の作品であるのに対して，筆者作品は油絵具とコラージュによる作品であり，日本絵画と西洋絵画の素材，技法による対照性を生み出すことで，大和文華館文華ホールの和洋折衷様式と対応させて展示構成とした。

さらに大和文華館文華ホールには，大和文華館周辺の景観を造形した立体模型があらかじめ設置してあり，今回の展示でこの模型も，展示の一部として有効に利用する案が現場の話し合いの中で生まれた。学生による共同制作はテーブル状の形式で配置されており，絵画だけでなく立体的な造形も含まれていることから，大和文華館の立体模型も違和感なく同時に展示することができた。また大和文華館の立体模型は，学生による創造的絵地図を，地形のリアリティによって補完し，会場全体のコンセプトをより明確にしてくれる効果が期待された。

図９　展示作業の様子

以上の展示構成によって，それぞれの作品内容についても相互に補完しあう関係を生み出すことができたと考える。前述のとおり，学生による共同制作は，学園前の過去・現在・未来をテーマとしており，学園前のフィールドワークを基にした創造的な絵地図を描くことを目的とした。また筆者作品は，大和文華館文華ホールがもともと奈良ホテルのラウンジであったことに着目し，創設100年以上の歴史を有する奈良ホテルに取材協力をいただき，制作を行った。奈良ホテルの歴史資料や館内の様子を基にした油彩とコラージュによって，文華ホールと奈良ホテルという場所の記憶を巡るタイムトラベルを絵画化することを試みた。さらに三瀬作品では屏風と掛け軸の形式の大画面に，実物大の東大寺盧舎那仏の姿をはじめ，日本列島を縦断する様々な断片的風景が絵具の偶発的なにじみの中に複雑に描き込まれている。三瀬作品からは，学園前や奈良にとどまらず，日本の歴史や芸術について，巨視と微視の両面から考察する意図を感じ取ることができる。

学生による共同制作，筆者作品，三瀬作品はそれぞれ，学園前，会場となる文華ホール，学園前や奈良を含む日本に焦点を当てている。これら３作品を同じ会場に展示することによって，「学園前の時空をマップ化するプロジェクト」というコンセプトを相互補完的に実現し，学園前の過去，現在，未来について多角的に考察することが可能な場を作り上げることができたのではないかと考える（図10，11，12）。

展示会場には，作品解説テキストと学生の共同制作の

様子をまとめたポスターも同時展示した。さらに，共同制作の方法論を提供してくれた東北芸術工科大学の「東北画は可能か？」の活動を紹介する資料も設置し，本プロジェクト全体の構想を来場者に広く伝えることを意図した。

図10　展示会場　全体図

図11　学生作品（中央）と三瀬作品（左，中央奥）

図12　学生作品（手前）と筆者作品（奥）

4. 7. 会期中の様子と関連イベント

2015年11月７日に「学園前アートウィーク2015」はオープンした。11月15日までの会期中，会場には奈良県内外から多くの来場者があり，出品作家と学生は展示会場で積極的に交流を行った。

特に会期初日と最終日には，出品者が来場者に作品解説を行うイベント「ダイレクト・トーク」が実施され，学生も来場者の前で協働制作作品についてのプレゼンテーションを行った。ダイレクト・トーク後は個別の質疑応答などの交流を行い，本プロジェクトの活動内容や作品のコンセプトについて，より深く理解いただけるように努めた。

学生の共同制作については，１枚１枚のパネルが学園前の地図の形になっていることや，会場中央の通路が近鉄奈良線を表していることを説明することで，作品により興味を持っていただくことができた。これによって学生作品の中に，学園前に特徴的な景観や歴史を発見してもらうきっかけとなり，さらに来場者の個人的な思い出をお話しいただくなど，多様な交流が生まれた。

また，会期中は全ての時間帯に筆者や学生が会場にいられたわけではなかったが，その際には会場受付をご担当いただいた地域のボランティアの方々に大変お世話になった。ボランティアの方々は出品作家や学生と進んで交流してくださり，筆者や学生が会場にいられない場合も来場者に自ら作品解説ができるよう，作品理解に努めてくださった。この経験から，地域型アートプロジェクトの実施には，地域の方々の理解と協力が不可欠であり，そのためには直接話し合いや交流を行う機会をできる限り多く設け，取り組みの意図を自身の言葉で丁寧に伝えることが出発点になることを改めて実感した。

９日間の会期で行われた「学園前アートウィーク2015」は，全ての会場の合計で6,150名の来場者があった。そのうち大和文華館文華ホールの来場者数は2,106名であった。また大和文華館文華ホールでは，会期中56名の地域のボランティアの方々が，会場受付や来場者への作品解説等をご担当くださった。

会期終了後は，筆者と学生によって作品の撤去作業を行い文華ホールをもとの状態に復元し，「学園前アートウィーク2015」は盛況のうちに閉幕した。

５．考察―成果と課題―

5. 1. 参加学生にとっての教育的意義

「学園前アートウィーク2015」では，先行研究における取り組みを参照しながら，芸術系大学以外の学生が制作者としてアートプロジェクトに関わった。本節では，「学園前アートウィーク2015」における大学生の共同制作について，地域，大学，アーティストとの連携の観点

から成果と課題を考察する。また，プロジェクトメンバーの学生による参加レポートを手掛かりに，参加学生にとっての教育的意義を明らかにしたい。

5. 2. 地域との連携についての成果と課題

「学園前アートウィーク2015」への参加を通して得られた成果の１つ目は，ある特定の地域についてのフィールドワークが，その土地への興味，関心を生み，特有性の理解へとつながると同時に，別の地域について考察する際にも応用可能な広い視野と想像力の獲得にも結び付くことを発見できた点にある。

本プロジェクトに参加した奈良教育大学の学生は，プロジェクト参加以前は学園前駅で電車を降りたことすらないメンバーがほとんどであった。しかし参加学生らは，本プロジェクトの打ち合わせや交流会で地域の方々のお話を伺ったり，実際に学園前地域を散策しながら写真撮影をしたり，文献調査を行う過程で，観光地としての奈良とは異なる側面を発見していった。

プロジェクトメンバーの学生Ａは参加レポートにおいて，プロジェクト参加以前は「地域性と聞いてイメージするのは伝統文化や文化財，祭りといったイメージであった」と述べ，本プロジェクトへの参加を通して「人が暮らす街というところでもアートプロジェクトが行われるのかと思った」と記述している。「人が暮らす街」とは一見当然のことのように思われるが，学園前のフィールドワークを通して学生Ａが実感したのは，古都奈良の典型的なイメージとしての地域性ではなく，日本全国各地でも見ることができる現代的な郊外型ニュータウンにおいてアートプロジェクトを行うことの意義であったと考えられる。また学生Ｂは，制作した作品について，「地域を知るに連れて魅力的なモチーフが，現在は残っていないものも多く，作品も過去の歴史からイメージを受けたものが多くなる傾向にあったと感じるので，もう少し現在の町並みを投影できたらよかった」と述べている。この記述から，地域の歴史と魅力を再発見することの重要性とともに，地域の現状をより深く観察し，未来への展望を考察する姿勢が芽生えていることがうかがえる。そして展覧会の来場者やボランティアの方々との交流の中では，過去・現在・未来と継続していく学園前の展望について，作品を通して話し合う光景が見られた。

また地域との連携についての課題点として，今回のプロジェクトでは作品制作にかかわる活動で手一杯となり，地域の方々との話し合いの中で提案があった子供たちとのワークショップなどの関連イベントを実現することができなかったことが挙げられる。特に教育系大学の学生にとっては，作品制作と同時に子供たちとの直接的な交流を行うことによって，美術教育における総合的な実践力を身につける機会となる。今回のプロジェクトを通して出会った地域の方々との継続的な交流によって，ワークショップ等の機会を積極的に設けたい。

5. 3. 大学間の連携についての成果と課題

「学園前アートウィーク2015」への参加を通して得られた成果の２つ目は，大学間の連携による共同制作を通して，参加学生同士が他領域の専門的知識・技能や価値観を学び合い，個人では実現困難な作品を分業制によって制作する方法論を提示できた点にある。

奈良教育大学のプロジェクトメンバーである学生Ａは参加レポートにおいて，奈良教育大学，帝塚山大学，東北芸術工科大学の３大学による共同制作について，次のように述べている。「アートプロジェクトに参加するのに私たちは何の手がかりもなかったので，やはりそこで学ぶ帝塚山大学の学生の感性と地域をテーマにしたプロジェクトに携わった東北芸術工科大学の経験が大きな手掛かりとなった」。

本プロジェクトにおける実際の準備と制作は，奈良教育大学と帝塚山大学の学生が行った。しかし両大学の参加学生は，これまでアートプロジェクトに制作者として参加した経験はなく，構想から制作までを共同で行うことも初めてだった。芸術系大学ではない両大学の学生が作品の構想，制作を行えたのは，東北芸術工科大学の「東北画は可能か？」プロジェクトからの資料提供を基に，その方法論を研究したことが大きな要因となっている。東北芸術工科大学の「東北画は可能か？」プロジェクトメンバーを対象に行ったアンケートでは，奈良教育大学と帝塚山大学の学生による共同制作について，「計画を立てて丁寧に制作しているように伺えます」との回答や，「調査資料の提供など大学を超えた関わり合いの中で制作が行われたことがとても興味深いです」といった感想をもらうことができた。

また，プロジェクト参加の企画段階で，当初から参加予定であった奈良教育大学と東北芸術工科大学に加え，帝塚山大学との連携に発展したことは，学園前のフィールドワークをもとにした作品制作において貴重な出来事であった。実際の作品制作では，制作用パネルを複数に分割した形態とすることで，奈良教育大学と帝塚山大学の学生が分担して作品制作をする体制を採用した。この分業制によって，離れた大学同士で共同制作を行い，限られた準備期間の中で，個人では困難なスケールの作品制作を実践することができた。また，奈良教育大学では絵画研究室メンバーによる絵画を中心とした作品を制作し，帝塚山大学のこども学科，居住空間デザイン学科学生の立体造形的アプローチによる作品との同時展示によって表現上の広がりが生まれ，それぞれの領域の特色について作品を通した交流と学びが生み出された。

このような成果を見出すことができた分業制による共同制作であるが，課題点として制作過程での各グループ同士の直接的交流をより密に行うべきであったことが挙げられる。前述のとおり，奈良教育大学と帝塚山大学学生にとって，共同制作の取り組みは今回が初めてであり，全ての工程が手探りの状態で進められた。そのため学生Ｃは参加レポートにおいて，「普段個人での制作が多いため，進度にばらつきがあった」と述べている。また学生Ｂも「定期的に交流を兼ねて報告会などの機会があった方が，情報共有としても役立ち，作品を高め合う機会になるのではないか」と振り返っており，参加学生同士で進行状況や全体的イメージを確認する作業が不足していたことが反省される。

この課題について，東北芸術工科大学の「東北画は可能か？」プロジェクトメンバーを対象に行ったアンケートの回答内に，以下のような重要な示唆があった。「東北画は可能か？」プロジェクトメンバーの学生Ｄは，共同制作を行う際に「どの段階で意思を共有し，お互いの考えをすり合わせていくのかというと本画の制作段階であると思います」と述べている。「東北画は可能か？」プロジェクトにおける共同制作では，大まかな下絵に基づいて，複数のメンバーが各々の解釈で制作を行い，「となりの子が描いているものにつなげるように描いたり，会話の中で新しい要素が加わったり，時にみんなで画面から引いて，必要のない箇所があれば潰していったり」といった工程が積極的に取り入れられる。このようなプロセスを経て展開する共同制作作品について「東北画は可能か？」プロジェクトメンバーの学生Ｄは，「話し合いの経過が画面にそのまま現れていると言っても過言ではないと思います」と述べている。

これらのことから，分業制による共同制作の際には，準備，構想段階における話し合いだけでなく，実際の作品制作の過程においてこそ各グループ間のコミュニケーションに特に留意すべきであることが浮き彫りになり，今後の活動における制作計画の際の課題としたい。

5. 4. アーティストとの連携についての成果と課題

「学園前アートウィーク2015」への参加を通して得られた成果の３つ目は，アーティストとの連携により，作品制作に関わる多様な思考とそれを実現する具体的な方法を学生自身が見出すきっかけとなったことである。今回のプロジェクトでは企画段階から，出品作家である三瀬と筆者とともに学生が作品構想に加わり，地域，大学，アーティストの連携による共同制作についての思考の展開を共有した。そして「学園前の時空をマップ化するプロジェクト」という全体コンセプトを軸としながら，それぞれ異なる表現技法により制作を行い，展示会場で相互に関連しあう構成とした。学生Ｃは「自身の作品が一部として組み込まれることによって作品のコンセプトがより近く感じられた」と述べており，それぞれ独立した作品でありながらも，個人の作家性を超えた共同体的思考を有した作品と空間を生み出しうることを実感していることがうかがえる。

また学生Ａは，学生による共同制作作品について，技術的には未熟であるとしても，「学生らしい“力作”はできたのではないかと考えるとまだまだ課題だらけである。もし，またこういうプロジェクトに参加させてもらえるチャンスがあれば，その時は“力作”といえるような制作をしたい」と述べている。アーティストとの連携による活動によって，コンセプトを実現するための技術的側面や作品の質の向上についてより意識的になったと考えられる。

さらに，「学園前アートウィーク2015」終了後の奈良教育大学では，プロジェクトメンバーが中心となり，今回の共同制作作品を含めた自主制作作品展を企画している。本プロジェクトを通して，作品の構想，制作，展示の具体的な実践方法を学び，この方法論を応用した学生主体の活動が展開し始めていると言える。

６．まとめ

本研究は，地域型アートプロジェクトに芸術系大学以外の学生が作品制作者として関わることの意義について，教育的視点から明らかにすることを目的としていた。「学園前アートウィーク2015」における学生による共同制作の実践は，地域，大学，アーティストが連携した美術教育の方法と意義を奈良の地から提案する新たな契機となったのではないかと考える。先行研究において示されていた，次世代教員として必要な「実践的環境における多様な価値観との出会いやそれらに対する対応力」を身につける方法について，学園前のフィールドワークをもとにした共同制作の現場から考察することができた。特に共同制作において，構想，制作，展示を３大学で交流しつつ分業制とすることで，複数の大学が連携して制作活動を行うための方法論を提示できたことは本研究の成果であると考える。また芸術系大学の取り組みの参照やアーティストとの連携は，芸術系大学以外の学生にとって，作品制作に関する多様な思考についての学びや，具体的な技術的問題の解決へとつながることが確認できた。

地域型アートプロジェクトは，テーマや内容が固定的なものではなく，地域の現状や問題提起に応じて常に流動的な変化が生じ，より多角的な考察を参加者に促す場であることが特徴的である。今後の展望として，奈良県内を中心にアートプロジェクトにおける学生による作品制作の機会を継続的に設け，制作プロセスにおけるコ

ミュニケーションの充実と作品の質の向上の両面から考察を続けたい。さらに地域でのワークショップ等を合わせて企画することで，地域の方々と作品制作の魅力を共有する場を創造することも課題とする。

付記

本研究を進めるにあたり，共同制作に参加した学生より参加レポート，アンケートの提出等の協力を受けた。ここに記し謝意を表したい。

また本研究は下記の助成を受けて行われた。

・平成27年度 奈良教育大学 学長裁量経費「美術教育実践力の養成―附属学校園や地域と連携したワークショップと展覧会の開催及び地域型アートプロジェクトへの参加―」

注

（1）文部科学省ホームページ「学科系統分類表」（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__iiicsFil/afieldfile/2015/12/25/1365633_4.pdf），2016.7.9取得

（2）熊倉純子監修『アートプロジェクト　芸術と共創する社会』株式会社水曜社，2014年，p.9

（3）加藤修・三宅中・吉村将人・伊藤香奈・大井藍「ESDとしての地域連携アートプロジェクトの実践報告―教育領域における地域連携の意味と役割―」，『千葉大学教育学部研究紀要』第60巻，2012年，pp.477-490

（4）同上，p.478

（5）同上，p.478

（6）同上，pp.488-489

（7）三瀬夏之介「東北画は可能か？」，『東北芸術工科大学紀要』No.21，2014年

（8）三瀬夏之介・鴻崎正武監修『東北画は可能か？』，東北芸術工科大学，2015年，p.1

（9）同上，p.4

（10）奈良・町家の芸術祭 はならぁと ホームページ〈http://hanarart.jp/〉，2016.5.4取得

（11）たんぽぽの家　ホームページ「奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2015-2016〈http://tanpoponoye.org/news/general/2016/01/15221522/〉，2016.5.4取得

（12）学園前アートウィーク2015ホームページ「開催趣旨」〈http://gakuenmae-art.jp/gaiyo-2/〉，2016.5.4取得

（13）同上「2015年度のテーマ 「イマ・ココ・カラ」」〈http://gakuenmae-art.jp/gaiyo-2/〉，2016.5.4取得

（14）大和文華館 ホームページ「大和文華館沿革」〈http://www.kintetsu-g-hd.co.jp/culture/yamato/history/index.html〉，2016.5.4取得

（15）学園前アートウィーク2015ホームページ「三瀬夏之介 学園前アートウィークに向けてのステイトメント」〈http://gakuenmae-art.jp/portfolio-item/natsunosuke_mise/ 〉，2016.5.4取得

（16）奈良市ホームページ「住宅開発等の経緯」〈http://www.city.nara.lg.jp/www/contents/1149048806114/index.html〉，2016.5.4 取得

平成28年５月６日受付，平成28年８月４日受理